

実施日：2022年12月26日

インタビュー対象者：神田重樹様・片岡喜光様（ともに1954年卒業）

調査補助者：間瀬紀子様／逗子開成担当片山健介

質問者：S2 生徒 S2C 遠藤真輝・佐藤航太朗・矢野拓也・／S2E 間瀬裕太・廣瀬周介
（学年は質問当時）

【当時の学校の雰囲気について】

- ・農業の授業が週に1度、披露山にある畑で行なわれていた。
- ・旧制の先輩は髭を伸ばしており、応援団の練習で怒鳴られた。
（遠藤）
- ・高校入学時の選択科目 絵画/習字 週一回の授業があった。
- ・披露山に畑があり、農業の授業が、高校生で週一回二時間続きであり、糞尿を運んだり、稲の脱穀を行ったりした。ただし、さつまいもや米はもらえなかった。農業指導は、石渡万太郎先生だった。
- ・夏休みには葉山において、植林や草刈りがあった。
- ・マラソンは2コースあった。1万mのコースは、海沿いの道を行き、御用邸の前を通過して、左に曲がり学校まで戻るコースだった。
- ・ハーフマラソンは授業のなかで行われ、田越川から逗子開成までだった。(5000m)。
- ・黒川澄夫さんが同級生だった。黒川さんは、陸上部でないにも関わらず体育祭の走る種目で優勝し、陸上部に引張られた。その後、県対抗の駅伝に出場、大学でもマラソンを続け、後に、黒川スポーツ経営、県会議員にもなった。
- ・片岡さんは、一浪していた際に、設立された図書室でバイトをしていた（10：00～17：00まで）。
- ・先輩は怖かった。
（廣瀬）
- ・当時、逗子開成には購買が存在し、今と同じようにパンが販売されていたそうです。現在の逗子開成の購買のパンは、横須賀で製造されているので、昔と変わるのかどうかという点を知りたかったので、御二方に伺って見たところ、逗子銀座の直角堂という店のパンが販売されていたそうです。（佐藤）

【入学前の小学校（国民学校）時代のこと】

- ・神田さん
国民学校の時、三崎は戦時中、空襲もなく安全なところで、陸軍もおり食料自給も良かった。麦や芋類などがあり食糧には何不自由ない状態だった。米軍の飛行機は東京、横浜に飛んでいくのを見たが、三崎は、目的地手前のため、爆弾が落ちることはなかった。給食はなく、家に帰って昼ごはんを食べた。第二次世界大戦が終わって数年後、小6の時に学校給食が始まり、脱脂粉乳がでた。給食の時間はしっかり定まっていた訳ではなかった。
（間瀬）
- ・片岡さん
通っていた西前小学校は横浜大空襲で焼けた。学童疎開には、縁故疎開と学校疎開の二つがあり、西前小学校では小3以上になると、湯河原に学校疎開で疎開する仕組みがあった。その際は、男女とも、横浜市が借り上げていたそれぞれ別の旅館に泊っていた。教員も一緒に疎開した。疎開先では、南京虫やしらみに苦しんだ。自分自身は、小3の8月に終戦を迎えた。母の実家が鎌倉にあったため、第一小学校へ。そして逗子の久木に住み逗子小学校へ。

【学校の登下校について】

・僕は今回の聞き取り調査で、登下校についてお話を伺った。当時の登下校の様子を現在と比べると、面白い違いがいくつかあった。例えば、夏場の逗子駅には"ものすごく大勢"の海水浴客（30万人？）が押し寄せていたそう。この混雑を避けるために、学校の夏休みの始まりを他校より早めた、とのこと。校庭が駐車場となった。個人的には、逗子駅前のロータリーにあった街頭テレビを観て電車を待っていた、というお話が昭和感が溢れていて、ワクワクしながら聴いた。街頭テレビは、逗子に住む正力松太郎氏からの寄贈とのことでした。（矢野）

【50周年式典について覚えていらっしゃること】

・逗子開成創立50周年式典については、御二方とも、あまり記憶に残っていないようでした。学校史によれば、記念品も当時の生徒に与えられた筈なのですが、やはり御二方とも記念品についても覚えていらっしゃらず、唯一記憶に残っていらっしゃったのは、後に内閣総理大臣に就任される橋本龍太郎氏の御父上である橋本龍伍氏（元厚生大臣）が、記念式典にいらっしゃったということでした。（佐藤）

【校舎について】

・校舎に関しては、位置は変わっているものもありましたが施設に入っているものは今の学校と大きくは変わらない。例えば、バスケットコート、柔道場、プールなど。しかし、変わっていた点もあった。それは、土俵。昔は屋外にあった。（今は土俵はなくなり、屋上に土俵風のペイントがあるのみ）（間瀬）

【部活について】

- ・柔道部、バスケ部があった。
- ・ヨット部、ボート部は鑑摺・葉山がたまり場だった。
- ・水泳部は道具が必要なく、海パン一枚で良いので、お金がかからないので人気だった。
- ・水泳部には、水泳界でも有名であった橋爪四郎選手が来校し、模範遊泳を行った時もあった。
- ・弓道場あり
- ・ライダー部あり
- ・相撲部はなかったが、土俵があった
- ・飛び込みの選手が逗子開成に練習しに来たこともあった
（廣瀬）
- ・音楽部に半年間在籍したことがあった。トロンボーンだった。入室時など礼儀に厳しかった。
- ・バレー部は当時9人制で、年間予算約2万円（校友会費予算約90~100万円ほどのうち）であった。籠球は2万円以下。水泳部やボート部は多くの予算をとることが出来ていなかった。なお、部費は、運動部が6割、文化部が4割ほどだった記憶がある。生徒同士で調整していた。教員は同席していなかった。野球部は9~10万だったか。

【好きだった授業や先生、記憶なさっている先生のあだ名など】

- ・海軍兵学校からいらした北澤貞造先生は怖い英語の先生であったが、秀才で体力もあり、旅行の時に短刀をもっていた。
- ・特攻隊の教官を担当されたこともある先生は仲間、教え子が戦死しているので、戦争の話は絶対にしなかった。

【海との関係】

- ・浜ランはその時代からあった。昔は、ふんどしで海に入るようなこともあった。(矢野)
- ・生徒の海水浴無し？ 水際を走る(排球部の合宿)。江ノ島まで泳ぐ(水泳部?、遠泳?)。
- ・夏には、1日30万人もの海水浴客が訪れており、一部の生徒はボートやビート板、タイヤチューブの浮き輪の貸し出しや、海の家でのアルバイトを行っていた。日給は180~240円程度。(遠藤)
ボートアルバイトは大変なため、日給500・600円だった。なお、逗子銀座本通りで販売されるかき氷(イチゴやメロンなど)は50円程度の時代、また「にこよん」といい、日雇い労働者が日当240円くらいの時代だった。

【創立者を同じくする鎌倉女学院生徒との関係】

- ・交流はなかったそうです。特に戦争中は、交流することは好ましいことではなかったようで、「タブーだった」そうです。そもそも、当時の逗子開成生徒達が女子生徒と付き合うこともなかったようです。(佐藤)
- ・スポーツでの男女交流はないが、俳句や絵などでの交流はあり(廣瀬)
- ・姉と母が鎌倉女学院生徒だったが、特に何もなかったよう。
- ・バレー部は、逗子の女学校と練習する機会があった。

【感想】

- ・これらから、戦時下や戦争後すぐの人の話を聞くことはなかなかできず、また逗子開成について知れる良い機会だったなと感じました。(間瀬)
- ・今回の聞き取り調査で、僕は現在と昭和の頃の逗子開成を、より親しみの持てる視点で比較できたと思います。昔の頃と今の自分たちの学校生活を比較し、新たな発見や今と変わらない逗子開成らしさが見つかり、逗子開成の歴史が感じられました。
"逗子開成の先輩"の方の実体験に基づいて比較したので、自分たちも共感できる点などが沢山あり、世代を超えた繋がりも感じました。(矢野)

【生徒である私が卒業生の祖父から逗子開成の話を聞いてみて】

- ・祖父が私の通っている学校を卒業していることは前々から知ってはいましたが、あまり学校について話すような機会もなく逗子開成に入り5年が経過しました。しかし、今回学校の創立120周年を記念して卒業生に学校などのことについて話を聞いてそれを私達なりに後輩たちに残して行こうという話になり、私の祖父とその高校時代の友人の方に話を聞かせて頂くこととなりました。その話し合いの中で様々な事に気が付きました。まず1つは、生徒は昔も今も様々なことが変わっていないということです。例えば、昼休みや帰りに海に行って泳ぐ人がいるということです。他にも、良い習慣とは決して言う事ができませんが、中学の頃はあまり勉強していないことです。やはり、中学の時は勉強したがるらないところは変わらないんですね。2つ目は昔逗子開成はお金持ちの人からお金がない人までが通っており、三崎のような場所には高校もなく逗子まで通ったり、とても近い人もいたり今以上に色々な家庭の人が来ていたということです。3つ目に昔はバイトができていて夏にバイトで稼ぐ事が可能だったことです。今現在、バイトは出来ないため全く違うなと思いました。この3つだけでなく他にも沢山の事に気付きがあり、話を聞くことができて良かったなと思いました。(間瀬)

【校史編纂担当教員より】

- ・片岡さんは、インタビュー終了間際にご自身が関わられているスリランカとの交流について語りかけてくださいました。スリランカは、あまり一般的には知られていない事実ですが、サンフランシスコ講和会議の際に日本の4分割案を否定したことで知られています。35年前に訪問なされた時には、終戦直後の日本に近い現実があったともお話をされていました。インタビューに携わった生徒たちにとって、関心の広がる機会をいただけたと思います。また、神田さんがお話して下さったこともとても貴重だと思いました。「通学に時間がかかるため、早く帰りたい」とおっしゃっていたのが印象的でした。こういったインタビューに応じてくださるOBの方は、母校との深い関わりを力強く語る方が多くいらっしゃいます。打ち込んだ部活動のお話や、やんちゃなエピソードなどをちりばめて楽し気にお話しくくださる方が多くいらっしゃるのです。しかし、神田さんは当時、通学に時間がかかり、電車やバスがなくなるので、早く帰ることに努めたとおっしゃっていました。授業に休講が生じると職員室に行き、授業の入れ替えを提案し、早く帰ることができるように先生方に意見を述べることもあったとの話もなさっていました。三崎から逗子開成に通う苦労や時間を大切に、後悔しないように努めていた神田さんの姿勢が印象的でした。100人いれば100人なりの学校生活があり、100通りの母校像があってしかるべきです。今回音声記録を残させていただきましたが、とても貴重な記録を残して下さったと思います。
- ・また、今も逗子銀座に残る洋菓子店の「珠屋」のお話や「八百屋の先にパン屋があつて～」「珠屋の前あたりに本屋があつて、昭和天皇がいらっしゃったときに立ち会った生徒がいて～」といった内容のお話を、ついでこの間のことのようにお話しなさっているお二人の姿が印象的でした。
- ・今回のインタビューは、はじめての試みでしたが、多くの方々の協力で実現できました。関係して下さった皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。本来、一つ一つのお話を後世に残す「資料」として検証していく必要がありますが、今回はお話の記録に努めました。検証は今後の課題とさせていただきます。
- ・何かお気づきの点がございましたら、学校HP お問い合わせフォームより、校史編纂宛にご連絡ください。
(社会科教諭 片山健介)

以上